

## 善意と文学 —— 語りの「丁寧」をめぐる

### 第14回

#### ジェーン・オースティンの不機嫌（下）

阿部公彦

Abe Masahiko

#### 小説家のイライラ

オースティンを読む際に「葛藤」というやや崇高な用語に飛びついてしまうと、見失ってしまうものもある。ハーディングはそのエッセーの表題で、あえて「嫌悪」(hatred)というやや泥臭い言葉を使っていた。そこが重要なのである。つまり、ハーディングが問題にしたのは、オースティンの不機嫌だった。不機嫌が作品の亀裂から漏れ出るという状況は、「葛藤」というスマートな表現ではすくい取れない何かを指し示している。不機嫌で、イライラして、周りの人間がどうにも許せなくなる。「小説的なもの」のより深い根はそこにあるのではないか。

考えてみると、『高慢と偏見』は機嫌の悪さに満ちた小説である。姉のジェーンと違い主人公のエリザベスは、頭の悪い人、凶々しい人、空気が読めない人のその鬱陶しさがいちいち気になるというタイプで、年中イライラしている。ただ、多くの場合、この苛立ちは諷刺的な視線を通してちょっと意地悪な笑いを引き起こすことで解消されていた。コリンズ氏やそのパ

トロンであるキャサリン・ド・バーの描写がその典型だろうが、ハーディングが指摘するように、こうした人物を笑うことでオースティンの悪意はいわば社会化されているのである。おかげで『高慢と偏見』には、表向きエレガントでなめらかな表層が保たれている。

しかし、そのような「社会化」におさまりきれない嫌悪感が垣間見える瞬間もある。表層がなめらかであればあるほど、こうした瞬間にいきあたるとどきっとする。たとえばエリザベスとダーシーは、物語の設定上、はじめはなかなかうまく交流できない。エリザベスはダーシーの性格を誤解し、非常に敵対的な態度を取るし、ダーシーの方は元々人見知りするというのもあって、ぶっきらぼうだ。そんな二人なので、言葉のやり取りにいちいち棘があるのはお約束のうちであり、愛嬌の一つと見えるかもしれないが、実はそうとも言いきれない場面もある。

以下に引用するのは、ネザーフィールドで開かれた舞踏会でかわされたエリザベスとダーシーとの会話である。むっつりしているダーシーを挑発するように、エリザベスは「こんどはあなたが何か言う番ですよ、ダーシーさん。私がダンスについてコメントしたんだから、こんどはあなたが部屋の大きさとか、カップルの数とかについて何か言わないと」とからむ。ダーシーの方はただ微笑んで、あなたが言ってほしいことを言ってあげますよ、などと応えている。それでエリザベスが「まあ、それくらいでいいわ。もう黙っていてもいいですよ」と言うと、ダーシーの方がこんなことを言うのである。

「ダンスのときは、決まりに従ってしゃべるのですか？」

「ときにはね。だって、少しは話をしないと。30分も一緒にすごして何も言わないというのも変でしょうけど、中にはね、なるべく口を開かないですむような形で会話をした方がいい人もいますよ」

「それは今現在のあなた自身の気持ちのことを言っているんですか？ それとも、ひょっとして私のために言ってます？」

「両方ですよ」エリザベスはいたずらっぽく言った。「だって、私たちの性格ってすごく似てるでしょ。二人とも付き合いが悪くて、黙りがちで、しゃべるのは嫌なんです。もし、しゃべるとしたら、部屋にいる人みんなをびっくりさせられるようなことを言わなきゃいけないと思ってる。後世に伝えられるような、立派な金言めかしたことをね」(102-103)

エリザベスのセリフはたしかにいたずらっぽく語られたものであり、映画などでは演出次第で媚態に満ちた陽気な場面としてつくりあげられるかもしれないが、このような一節にはハーディングが注目したような「不機嫌なオースティン」の像の一端がたしかに読み取れると思う。

とりわけ気になるのはエリザベスがここで、「立派な金言めかしたこと」(with all the eclat of a proverb)という言い方をしていることである。このダーシーとの会話でも言及されているように、実はエリザベスの不機嫌の根にあるのはきわめて言葉的な何かではないかと思うのである。その何かを示すのが「金言めかした」という言い方である。

エリザベスは快活な女性である。小説冒頭でも体調を崩したジェーンを見舞うために、数マイルの距離を泥まみれになりな

がらひとりで歩いてしまうような元気さにあふれ、身分が上の相手にも、ずけずけと言いたいことを言う。男を相手にしても物怖じしない。コリンズやダーシーのプロポーズもきっぱり断るし、キャサリン・ド・バーに「ダーシーと結婚するな」とおどされてもひるまずに言い返す。しかし、たしかにときに雄弁ではあるかもしれないが、果たしてエリザベスは多弁な女性だろうか。礼儀作法に支配された表層的な世界とほどほどに付き合い、作法をわきまえた丁寧な挨拶くらいはかわしても、その上辺だけの心地良さや善意にはむしろうんざりしているのがエリザベスなのではないだろうか。上に引用したダーシーとの会話のほかにも、たとえばジェーンとの会話には次のような一節がある。

世の中を見れば見るほど、嫌になる。人間の性格っていうのは矛盾だらけで、見たところ長所や分別だと思えたものがおよそあてにならないって、日々、確信してるの。(153)

世界の善意を信じるジェーンと、それとは正反対なエリザベスの性格とがこうして対比的にならべられるわけだが、では、信用ならない世の中の「上辺」や「見かけ」に対して、いったい何が信頼できるのか、いったい何に拠ることでエリザベスはこれほどの苛烈さで人間や社会を断罪することができるのかというと、そこにあるのが彼女独特の言葉の使い方なのである。

先ほどのダーシーとの会話に先立つ場面、舞踏会でダーシーに最初に声をかけられたときのエリザベスの反応は、まずは「拒否」の姿勢だった。シャーロットの「あの方、きっといい人だと思うわよ」(I dare say you will find him very agreeable)

というセリフに対して、エリザベスのセリフは以下のようなものである。

「まさか！ それは最悪だわ。嫌うことに決めた人が、いい人だとわかるなんて。そんな嫌なことが起きるように願うなんて、しないでね」(101)

日本語訳ではどうしてももたついた言葉遣いになってしまうのだが、「嫌うことに決めた人が、いい人だとわかるなんて」という部分の原文は **To find a man agreeable whom one is determined to hate!** となっている。つまり、金言や格言ではないにしても、金言や格言を思わせるような、シャープな対句性、皮肉なひねり、聡明さなどが、こうしたセリフのちょっとした言葉遣いからにじみ出しているのである。<sup>1</sup>

このような箇所には、エリザベスの言葉との付き合い方の特徴がはっきり表れている。エリザベスにとっての言葉とは、「上辺」や「見かけ」をつくるための、つまり相手を心地良くするための明るい「善意」の装置などではなく、暗い攻撃的なものなのである。鋭利で皮肉で、何よりその素早い凝縮感ゆえに、雄弁よりはむしろ沈黙に近いような、話し言葉よりも書き言葉に近いもの、それがエリザベスにとっての言葉なのであ

<sup>1</sup> 当然ながらこのような構文のパターンは、いかにも 18 世紀的な、前半と後半でバランスをとるような均衡的シンタクスの名残りともみなせるもので、たとえばノーマン・ページはオースティンの構文の特徴を精査したうえで、後期の作品に向かうにつれオースティンが均衡的な構文から脱皮していったとしているが(90-113)、本稿ではむしろそうした構文への作家のこだわりを注目する。

り、それが彼女の「ほんとうの自分」を保証している。そんな鋭利さを「悪意」と呼ぶのはやや気が早いかもしれないが、ハーディングが「嫌悪」と呼んだような暗いもやもやがきわめて集約的にそうした言葉のあり方に表れていると考えることはできそうである。<sup>2</sup>

18 世紀は近代英語が安定期に至った時代とされるが、それは礼節の基軸をなしてきた **polite English** に対して懐疑の念が芽生えつつあった時代でもあった。『チェスタフィールド卿の手紙』の刊行に伴う騒ぎはまさにその象徴であろう。一方でごくふつうに作法の指南書として出回った本が、他方、とんでもない偽善性に満ちたスキャンダラスなものとして批判を浴びましたという事実には、この時代の過渡期らしさが反映している。タンドンも指摘するように 18 世紀半ばあたりから、形式張った作法よりも、自然な態度を会話に求める傾向は強くなっていったのであり(1-54)、ほかならぬ『チェスタフィールド卿の手紙』にしても、取り澄ました上品さへのこだわりが批判されがちだが、実際には自然な態度にそれなりの力点を置いてい

<sup>2</sup> サウザムは『高慢と偏見』を含むオースティンのいくつかの作品が、元々書簡体小説として構想され、推敲の過程で現在のような、いわば凝縮した形になっていったという説を唱えている。多弁や饒舌と、研ぎ澄まされた鋭い言葉との拮抗は、あるいはそのような創作過程とも関連づけられるかもしれない(45-62)。

なお、**Dominique Enright. *The Wit and Wisdom of Jane Austen: Quotes from Her Novels, Letters and Diaries* (London: Fourth Estate, 1996)** というような本を見てもわかるように、オースティンは短く鋭いコメントに多くをこめるのを得意としていた。

る。『高慢と偏見』でも、コリンズや、キャサリン・ド・バーや、そしてときにはダーシーが、作法や慣習に振り回される人々として諷刺の対象になっているのは明らかで、それと対比される形でエリザベスは、より身軽で自由な人物として登場する。その身軽さをもっともよく表したのが、嫌悪や悪意をちらつかせる切っ先の鋭い言葉だったというのがおもしろい。

そして、この鋭利さのおかげでエリザベスは——そしてオースティンは——「上辺」や「見かけ」にまどわされることなく真理に接近することができる。とりわけ小説の後半、よりほんとうのことをめざしてエリザベスや小説の語り手が探究の姿勢を深めるにつれて、小説の言葉そのものが“金言的”になっていく。大団円近く、ダーシーに対する誤解をすっかり解いたエリザベスが、果たして彼は自分にどのような気持ちを持っているのか、はらはらしながらそのアプローチを待っているという場面があるが、そこで、それまでの経緯など知らずに父親がふと「だってあの人はお前になんかまるで興味ないものなあ」と口にする。<sup>3</sup> これを聞いたエリザベスの心境は次のように描写されるのである。

父はダーシーがエリザベスに興味など持っていないと口にするので、実に惨酷に彼女を傷つけたのであった。エリザベスとしてはこの洞察力のなさにただびっくりするか、もしくは

<sup>3</sup> 父親が「興味ないものなあ」などと言ったのは、ダーシーとエリザベスが婚約するという噂が耳にはいつてきて、それがあまりに現実的でないと思ったからである。父親はてっきりエリザベスがいまだにダーシーを嫌っており、ダーシーの方でもエリザベスにはまったく関心がないと信じ込んでいるのである。

は、ひょっとすると父にもものが見えていないというより、自分の方が想像しすぎているのではないかと恐れるくらいしかできなかった。(404)

最後の一節は原文では、**she could do nothing but wonder at such a want of penetration, or fear that perhaps, instead of his seeing too little, she might have fancied too much.** となっている。とくに太字にした部分では、金言めいたシャープな対句性を通して、きわめて知的な凝縮感とともにエリザベスの痛切な心境が語られているのがわかる。

つまり、『高慢と偏見』の言葉は、真理に接近し、切実で大事なことを語る場面になると、俄然言葉が圧縮され、ある意味では「寡黙」になるのである。第34章のダーシーによるプロポーズの場面にも見られるように、大事な場面では、たとえ言葉をたくさん費やした描写であっても、頻出する「間」(pause)や間接話法を駆使することで、なるべく騒々しくない形で出来事が語られる。結末にむけて語り全体の究明の姿勢が強まるにつれ、会話が減り地の文の割合が増えるのもそのためだろう。

こうしてみると、『高慢と偏見』の世界は、二種類の言葉の拮抗によってできあがっていることがわかってくる。礼節のルールに則った表面的で善意に満ちた言葉と、そうした言葉とは違って深い部分に到達するような、鋭利で皮肉で猜疑心に満ちた言葉——「悪意に満ちた」と呼びたくなるような、いささか不機嫌で意地の悪い言葉——のふたつである。比重が置かれているのが後者なのは明らかである。そういう意味でも『高慢と偏見』の世界は、作法を指南しつつも、作法の世界にすっかり

ひたることができずにやや居心地の悪い思いをしているらしい『チェスタフィールド卿の手紙』の書き手の世界と通ずるようである。逆に言うと『チェスタフィールド卿の手紙』の方は、「小説的」であるための要件がかなり満たされた書物だとも言える。

ただ、ひとつ違うことがある。『高慢と偏見』では「小説的なもの」が最終的には結婚という物語に従属する。しかもそれは単なる結婚であっては用をなさない。そこに決定的な要素としてからんでいるのは、“贈与”という要素である。エリザベスのダーシーに対する感情を好転させたのはリディの窮地を救ってくれたダーシーの活躍だが、そこでもっとも重要な意味を持ったのは、ウィカムにリディを誘惑させてしまったこと責任を感じたダーシーが、金銭による介入を行ったということである。また、エリザベスとダーシーとの結婚も、それがダーシー自身も認めるように明らかな身分違いの結びつきで、それゆえ財産家のダーシーによるベネット家への一方的な財産の贈与という性格を持っていた。

『高慢と偏見』の世界は、これらの贈与なくしては成立しなかった。これはいったい何を意味するのだろうか。エリザベスは「上辺」や「見かけ」を信用しない人物として描かれている。それはつまりは上辺の善意を、上辺だけの「与える姿勢」を信用しないということである。丁寧の原理は、相手に惜しげなく与えるジェスチャーを見せることを軸としている。そのことによって、お互いを心地良くする。政治の現場であれば、「与える姿勢」のやり取りによって、互いの利益のバランスがはかれるわけだが、このような善意のやり取りが、狭い宮廷のサークルを超えてより広い社会に広がったのが 18 世紀から 19 世

紀という時代だった。

このようないわば「善意のポリテックス」の欺瞞を痛感したエリザベスは、苛立ちと不機嫌を通して、反抗を試みる。そこにまさに『高慢と偏見』の“小説的瞬間”があった。近代小説が拠って立つことになる〈個人対社会〉という小説的想像力の枠組みもそこから生成している。しかし、『高慢と偏見』が単に「小説的」であるだけでなく、小説作品として成就するためには、拒絶と不機嫌に根ざした寡黙さへと邁進するだけでなく、どこかで「善意」の力を借りる必要があった。むしろそれは「上辺」のものではなく、むしろ深層に隠れていて、下手をすると人目につかずに終わったかもしれない、そういう意味では究極の「善意」だったわけだが、それとならんで重要なのは、この善意が財産の贈与という形をとらざるをえなかったということである。しかもそれは、持つ者から持たない者へという構造を持った贈与であった。『高慢と偏見』のエリザベスはその徹底した不機嫌により「善意」に対してきわめて微妙な立ち位置をとっているわけだが、最終的に物語を決着させるのが持つ者から持たない者への財産の贈与という行為であるという点には、文学と「善意」との複雑な関係を見て取ることができるかもしれない。そこにあるのは、物語を語るというジェスチャーにもともと内在する、相手に与え、相手を喜ばすという対人的な「善意」の衣装から離脱しつつも回帰するという、なかなか回りくどい作法なのである。たしかにそこには欺瞞を見て取ることもできるかもしれない。オースティンの不機嫌が結局は明確な行き場を持たなかったのもそのためかもしれない。しかし、19 世紀から 20 世紀にかけての近代小説が「小説的なもの」にまつわる悪意や嫌悪やニヒリズムを消化するに際して

いかなる困難に直面してきたかを想起するなら、そこに「いかにもオースティン的な退屈」を見て取るだけではすまないような気もするのである。

### 〈文 献〉

\*『高慢と偏見』のテキストは、以下のケンブリッジ版を使用した。*Pride and Prejudice (The Cambridge Edition of the Works of Jane Austen)*, ed. by Pat Rogers (Cambridge: Cambridge U.P., 2009)

Brontë, Charlotte. *The Letters of Charlotte Brontë, vol. 2, 1848–51*, ed. by Margaret Smith (Oxford: Oxford U.P., 2000)

Chesterfield, Lord. *Letters*. Ed. by David Roberts (London: Oxford U.P., 1992)

Harding, D.W. “Regulated Hatred: An Aspect of the Work of Jane Austen,” *Scrutiny* 8 (1939–40), 346–62. / in *Regulated Hatred and Other Essays on Jane Austen*, ed. by Monica Lawlor (London: Athlone P., 1998)

Hodge, Jane Aiken. *The Double Life of Jane Austen* (London: Hodder and Stoughton, 1972)

Halperin, John. *The Life of Jane Austen* (Sussex: Harvester P., 1984)

Mazzeno, Laurence W. *Jane Austen: Two Centuries of Criticism* (Rochester, NY: Camden House, 2011)

Page, Norman. *The Language of Jane Austen* (Oxford: Basil Blackwell, 1972)

Southam, B.C. *Jane Austen’s Literary Manuscripts: A Study of the Novelist’s Development through the Surviving Papers*.

New edn. (London: Athlone P., 2001/1964)

Tandon, Bharat. *Jane Austen and the Morality of Conversation* (London: Anthem P., 2003)

(東京大学准教授)